

32 フラカストロの伝染理論

伊藤 和行

シロラモ・フラカストロ (Girolamo Fracastoro, ca. 1478-1553) は一六世紀前半に北イタリアのヴェローナで活躍した医学者である。彼の名前が医学史上挙げられるのは主として、梅毒を論じたラテン語の六步格詩『シフィリスあるいはフランス病』(Syphilis sive morbus Gallicus: 1530)による。その中で彼は、当時のイタリアでは「フランス病」と呼ばれていた梅毒に対して「シフィリス」(syphilis) という名称を授けた。

フラカストロは、『シフィリス』で萌芽的な形で示されていた自らの伝染理論を『伝染、伝染病とその治療について』(De contagione et contagionis morbis et eorum curatione: 1546)において展開している。それでは当時猛威を振るっていたペストや梅毒に代表される伝染病の伝

染のメカニズムが粒子論に基づいて述べられている。近代的な伝染病理論の先駆と言われるこの著作は三巻から構成され、第一巻では伝染理論、第二巻では伝染病、第三巻では伝染病の治療について論じられている。今回は第一巻における伝染理論について検討する。

フラカストロによれば、疾病の原因となる体液などの腐敗が他の人間に伝搬されることから伝染が生じる。この伝染の「原理」は、「種子」(seminaria) と呼ばれる、腐敗から生じて「熱く湿った粒子」、「不可感的な粒子」(すなわち「微小で視覚からも逃れうる粒子」)である。伝染は「種子」の伝播方法によって三つに分類される。

第一の相互接触によるものは、果物の腐敗に見られるように、最初のものから発散する「種子」が接したものに直接移って第二のものの中に腐敗を生じさせることによる。第二の媒介物を介するものは、最初の患者に接した衣服などの物体の中に「種子」が保存されることによる。第三の遠くへ伝染するものは、空中に発散した「種子」が他の場所へ運ばれることよって起こる。とくに遠隔

伝染は、星辰の影響、「隠れた性質」や「スピリトゥス」の介在といった形而上学的な説明がなされてきたのに対し、フラカストロはそのような主張を断固として否定し、それを、粘り強い結合からなる分解しづらい粒子が遠方まで空気によって運ばれることによつて説明する。

このようなフラカストロの「種子」の伝染理論は、伝染の原因を環境とりわけ大気の汚染や星辰の影響に求めた伝統的理論を、さらに粒子論に基づいて説明するものであった。しかし彼の伝染理論の核心である「種子」の実体は必ずしも明確でなく、生物学的なものか非生物学的なものかも曖昧である。すなわち「微小粒子の粘り強い結合」からなると述べられている一方では、ある種の腐敗の生じている体内で自然発生することもあり、他の生物の体内に入ると体液に付着して増殖するとされている。彼の「種子」は感覚によつて捉えられない思惟的なものであったが、神秘的なものを排除し、自然のメカニズムによつて説明しようという徹底した自然主義の立場は注目すべきものであった。

フラカストロの伝染理論の基盤となっている粒子論的

考察の背景にはルネサンスにおける古代原子論の復興があった。彼は一五二五年に出版されたルクレティウスの『事物の本性について』を読み、その最後の部分における疫病に関する一節から着想を得ていた。古代原子論はデカルトにおいて彼の機械論哲学の基盤である粒子論を提供していることはよく知られているが、すでに一五世紀末頃から自然哲学に影響を与え始め、伝統的なアリストテレス自然学に対抗する自然哲学の新しい試みに理論的基盤を提供していた。フラカストロも病気の原因を体液の不均衡や腐敗に帰する点では明らかに伝統的な医学理論の圏内におりつつ、同時に説明の困難な伝染の問題を説明するために粒子論を取り入れることを試みたのである。

(京都大学文学部)